

大学生の「ひきこもり」に対する印象

目白大学大学院心理学研究科 温泉 美雪
目白大学人間学部 小野寺敦子

【要 約】

本研究の第一の目的は、大学生を対象とし、ひきこもりとその家族に対する印象を調査することであった。6ヶ月以上のひきこもり状態を維持している当事者に対する印象は「部屋でゲームをしている」などおおよそ実態に合ったものであったが、「他者との交流を積極的に避けている」という偏った印象が認められた。また、家族はひきこもっている子どもに「無関心」であったり、「過干渉」であるという印象を持っていた。

次に、第二の目的として、ひきこもりと認める期間と性によるひきこもりの印象の違いについて検討したところ、以下の結果が得られた。ひきこもりについて、男性は「ゲームをしている」「昼夜逆転している」という顕在的行動に、女性は「コミュニケーションが苦手」「不安が強い」など認知や感情面に着目する傾向が認められた。また、女性は男性より、ひきこもりと認める期間が短い人の割合が多かった。さらに、男性の中でひきこもりと認める期間が6ヶ月未満の人は、ひきこもりから「ニート」や「社会不適合者」など、ネガティブな印象を抱いていた。これらのことから、全般的に女性は男性よりひきこもり状態の心理的側面に着目しやすく、ひきこもり当事者が対人交流を求めている場合にはソーシャルサポートの提供者として期待できることが示唆された。

キーワード：ひきこもり，家族，印象，性差，大学生

ひきこもりとは、厚生労働省（2010）によると、「さまざまな要因の結果として社会参加（義務教育を含む就学，非常勤職を含む就労，家庭外での交遊など）を回避し，原則的には6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と関わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念」である。内閣府は2012年と2016年に15歳から39歳を対象としたひきこもりに関する全国調査を行い、「自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」という人を広義のひきこもりとした上でその割合は1.75%であり、ひきこもり状態にある若者が全国に54万人存在すると推定した。このうち、ひきこもり期間が7年以上の対象者は2012年が16.9%、2016年が34.7%であり、ひきこもりの長期化が示唆された。一方、全体の10%程度が過去にひ

きこもりを経験していたが、このうち70%近くは3年以内に社会参加が可能になっていた。これらの結果から、ひきこもりを経験した人は、短期間でその状態を解消する一群と長期化する一群に二極化していると考えられ、ひきこもり状態から社会あるいは支援にアクセスしていく過程を明らかにすることは急務である。

ひきこもり当事者は、「周囲からひきこもっていると思われたくない」「自分がひきこもりであると認めたくない」と考えており、相談することに抵抗を感じるため、支援につながるのはひきこもり当事者の家族であることが多い（境・川原・NPO法人全国引きこもりKHJ親の会，2008）。また、ひきこもり当事者の家族は80%以上が相談ニーズを有しているものの、家族の精神疾患に対する偏見は受療行動を阻害す

るという報告がある(中村他 2006)。こうした背景には、ひきこもり当事者やその家族が抱くひきこもりに対するステレオタイプがあると考えられる。援助要請に関する大学生を対象とした調査において(雨宮・松田, 2015)、友人によるサポートの知覚は援助要請行動に強い正の影響をもたらすことが明らかにされている。また、Vogel, Wade & Hackler (2007)によると、社会にある特定の対象への偏見や差別が個人に取り込まれると、自分自身がそれらを受けると認識され、援助要請態度に負の影響を与えられている。池上・斎藤・荻上(2016)は、ひきこもりの家族内殺人や無理心中などの一部の極端な報道はひきこもり当事者や家族を追いつめるとし、ひきこもりに対して否定的な印象が形成されることに懸念を示している。以上をふまえると、一般的にひきこもりに対する否定的な印象があるならば、それを当事者やその家族が取り込むことにより彼らの援助要請行動は抑制される可能性がある。さらに、ひきこもり状態にある人やその家族に対するサポートティブな態度は彼らの援助要請を促進することが期待される。

そこで本研究では、ひきこもり状態にある人と同世代の大学生を対象とし、ひきこもり当事者やその家族に対する印象を調査することを第一の目的とする。そして、得られた印象とひきこもりの実態の間に相違が認められるかについて検証する。

本研究では大学生である調査対象者について、ひきこもりを回避するソーシャルサポートとなりえる存在と位置づける。そして、大学生が周囲の人のひきこもり状態に早期に気づきサポートティブな態度を示す可能性を探索することを第二の目的とする。そこで、ひきこもりの操作的な定義である6ヶ月以上の社会参加の回避という期間を限定せずに、ひきこもりと認める期間について回答を求める。そして、大学生がひきこもり状態を早い段階で「通常とは異なる状態」とみなした場合の印象に親和性が認められればサポートティブな態度を示すことが期待できると考え、6ヶ月未満をひきこもりと認める人の印象について、6ヶ月以上に渡る状態をひきこもりとした人の印象と比較する。また、ひ

きこもっている人のうち男性は6割を越えるのに対し、「ひきこもっている人の気持ちがわかる」、あるいは「ひきこもりたいと思う」というひきこもりに親和性のある人の6割近くが女性であることから(内閣府, 2016)、ひきこもりの印象には性差のある可能性がある。そこで、ひきこもりに対する印象について、ひきこもりと認める期間の長さや性差による違いを検討する。

方法

調査対象者 東京都および神奈川県内の大学に通う大学生276名に質問紙を配布し、性別、ひきこもりと認識する期間、ひきこもりに対する印象について記載漏れのない243名から、60歳台の男性1名を除いた242名を有効回答とした(有効回答率87.7%)。対象者は男性115名(平均年齢19.1歳, SD=1.6)、女性127名(平均年齢19.0歳, SD=1.0)であった。

調査手続き 2018年7月に、心理学に関する大学の講義前または終了直前に調査を実施した。倫理的配慮として調査の匿名性や非強制性について説明し、調査への回答をもって研究に同意したとみなすことを告げた。

調査内容

1. 教示文 「ひきこもりとは、『学校に行ったり仕事をしたりせず、家庭外での交遊を避け、おむね家庭にとどまり続ける状態をさします』『ただし、他者と交わらない形での外出(趣味のことで出かける、コンビニに行く)は含まれます』『なお、病気や怪我により療養している場合はのぞきます』」と教示した。

2. ひきこもりと認める期間 「ひきこもり」と呼ぶにふさわしい日数(年/月/日)の記述を求めた。

3. ひきこもりとその家族に対する印象 「ひきこもり」や「ひきこもりと呼ばれる人がいる家族」について頭に浮かんだ言葉や文章をできるだけ多く記述するよう求めた。

分析方法

1. 群の構成 ひきこもりと認める日数について得られた回答を月換算し、その期間が6ヶ月以上の者を「6ヶ月以上群」、6ヶ月未満の者を「6ヶ月未満群」と定めた。

2. 目的1

ひきこもりおよび家族に対する印象の調査 6ヶ月以上群の「ひきこもり」や「家族」に対する印象についてテキストマイニングにより語の頻出数を抽出した。回答のネットワーク構造を見いだすために頻出する語と語の類似性についてJaccard係数を算出し、共起ネットワーク分析を行った。

3. 目的2

ひきこもりと認める期間と性の違いによる、ひきこもりに対する印象の相違の検討

「ひきこもり状態にある人」に対する印象について、テキストマイニングにより6ヶ月未満群の頻出語を抽出した。また、6ヶ月未満群と6ヶ月以上群について、それぞれ性差を加味した4群に分類し、各群の特徴を明らかにするために対応分析を行った。

全ての目的におけるテキスト分析のためのソフトウェアにはKHcorder3を用いた。

結果

1. ひきこもりと認める期間 ひきこもりと認める期間の中央値は3.0ヶ月であり、ひきこもりを定義する期間である6ヶ月の半分であった。6ヶ月以上群の回答数は103(全回答の42.6%)であり、そのうち男性は54(全男性の47.0%)、女性は49(全女性の38.6%)であった。6ヶ月未満群の回答数は131(全回答の54.1%)であり、そのうち男性は61(全男性の53.0%)、女性は78(全女性の61.4%)であった。全回答のうち、6ヶ月未満群は6ヶ月以上群より1割程度多かった。また、男性はおおよそ半数ずつの割合で両群に分散したが、女性は6ヶ月未満群の方が6ヶ月以上群より2割程度多かった。

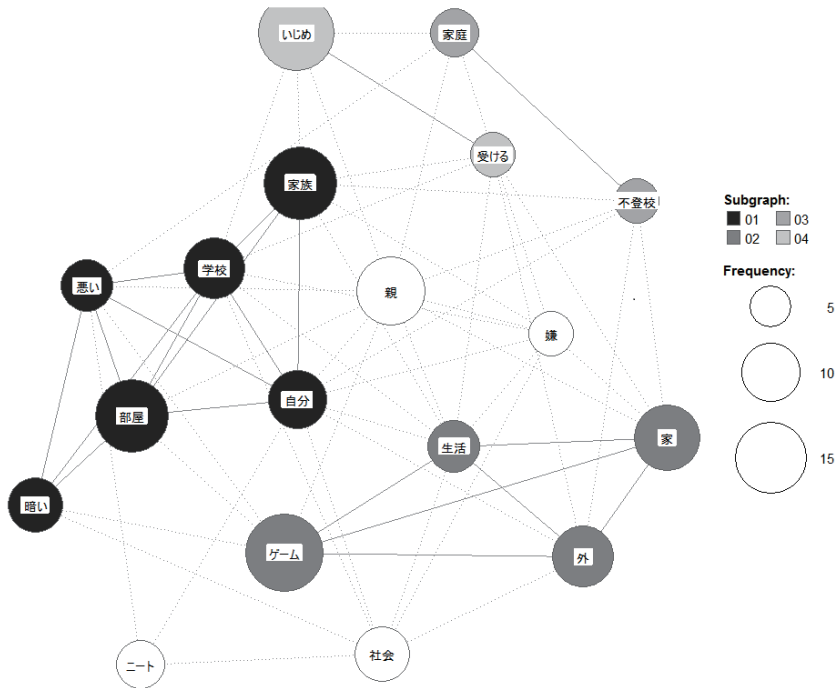
2. 6ヶ月以上群のひきこもりに対する印象

抽出語 6ヶ月以上群のひきこもりに対する印象は頻度別にTable 1に示す通りであり、「ゲーム」、「いじめ」「家族」「部屋」といった語が頻出していた。

語の共起ネットワーク ひきこもりに対する印象を捉える共起ネットワーク分析を行うにあたり、ひきこもりの印象として解釈可能なネットワーク構造を得るための語の最低出現度数を6とした。Figure 1に示す通り、ひきこもりをイメージする島は4つに分かれた。4つの島は「自分/部屋/家族/悪い/暗い」、「家/ゲーム/

Table 1 6ヶ月以上群のひきこもりの印象

出現数	抽出語	出現数	抽出語
18	ゲーム	8	生活, 悪い
17	いじめ	7	家庭, ニート
16	家族, 部屋	6	嫌, 受ける, 不登校
14	親	5	依存, 関わり, 環境, 気, コミュニケーション, 辛い, パソコン, 問題
13	家	4	インターネット, 心, 仕事, 精神, 対人, 他者, 出ない, トラウマ, 無い, 仲, 苦手, 人間, 人間関係, 話す, 持つ
11	外, 学校	3	関係, 恐怖症, ゲーマー, 交流, 収入, 状態, 不安, 不健康, 不信, やる気, 理解
10	自分	2	居る, 動く, 起きる, カーテン, 会社, 外出, 過去, 傷, 嫌い, 健康, 現実, 孤立, 避ける, 寂しい, 疾患, 趣味, 食事, 白い, 好き, ストレス, 食べる, 昼夜逆転, 強い, 出来る, 友達, ネット, 働く, 暴力, 前, 周り, 無職, メンタル, 弱い
9	暗い, 社会	1	SNS, うつ病, お菓子, お金, かけ離れる, ぐちゃぐちゃ, ご飯



バブルの大きさは語の出現数を表す。共起度が高い程、実線は太い。

Figure 1 6ヶ月以上群のひきこもりに対する印象

外」,「家庭/不登校」,「いじめ/受ける」を代表とする語で構成されていた。

3. 6ヶ月以上群の家族に対する印象

抽出語 6ヶ月以上群のひきこもり状態にある人の家族に対する印象は、頻度別にTable 2に示す通りであり、家族構成や家庭を表す語を除くと、「会話」「甘い」「少ない」「甘やかす」「過保護」が頻出し、ネガティブな語が多く抽出された。

語の共起ネットワーク 家族の印象を捉える共起ネットワーク分析を行うにあたり、家族の印象として解釈可能なネットワーク構造を得るための語の最低出現度数を5とした。Figure 2に示す通り、家族をイメージする島は5つに分かれていた。5つの島は、「仲/良くない/両親/仕事」,「過保護/無関心」,「金持ち/甘やかす/問題」,「会話/少ない」,「親/甘い/子ども」を代表する語で構成されていた。

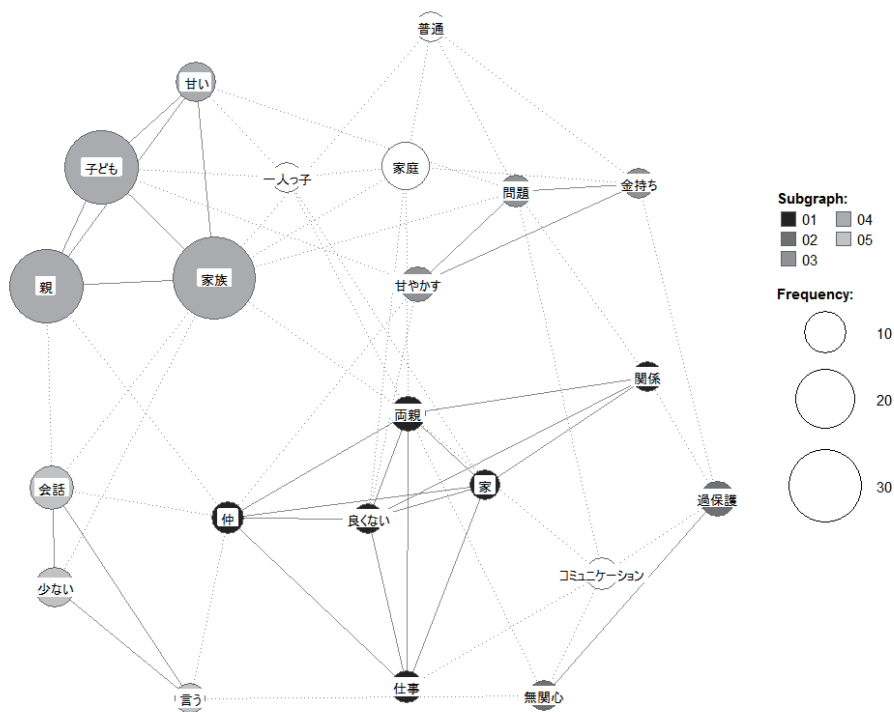
4. ひきこもりと認める期間と性の違いによる、ひきこもりに対する印象の相違

6ヶ月未満群の抽出語 6ヶ月未満群のひきこもり状態にある人に対する印象は、頻度別にTable 3に示す通りであり、「ニート」「学校」「ゲーム」「自分」「部屋」「暗い」が頻出した。また、「社会不適合者」の出現数が7と高かった。本群では「ニート」が最も多く抽出され、「社会不適合者」も頻出しており、ひきこもりを社会に適応しにくい存在としてネガティブにイメージされていた。

ひきこもりと認める期間と性の違いによる、ひきこもりに対する印象の相違 ひきこもりの印象について対応分析を行うにあたり、解釈可能なひきこもり印象の分布を得るために採用した語の最低出現度数を7とした。ひきこもりと特定する期間と性別による4群の印象の分布をFigure 3に示す。4群の配置から、成分1の軸はひきこもりと特定する期間、成分2の軸は性別の違いを示していると解釈された。この解釈に基づき、男性の6ヶ月未満群は「ニート」「社

Table2 6ヶ月以上群のひきこもり家族の印象

出現数	抽出語	出現数	抽出語
36	家族	6	コミュニケーション, 仕事, 仲, 母親, 一人っ子, 問題
31	親, 子ども	5	言う, 家, 金持ち, 関係, 普通, 無関心, 良くない
16	家庭	4	多い, 干渉, 父親, 放置, 暴力
11	会話	3	忙しい, 抱える, 家庭内, 環境, 関心, 厳しい, 暗い, 経済, 困る, 大変, 共働き, 働く, 不足, 優しい, 許す, 離婚, 分かる, 悪い
9	甘い, 少ない	2	DV, 相手, 嫌, 上手い, 学校, 考える, 聞く, 期待, 気持ち, 金銭, 経験, 喧嘩, 子離れ, 孤立, 逆らえる, 自分, 社会, 周囲, 食事, 心配, 好き, 少し, 生活, 地域, 強い, 辛い, 出ない, 共に, 人間, 貧困, 不安定, 父子, 部屋, 放任, 母子, 身内, 持つ, 余裕, 理解
7	甘やかす, 過保護, 両親	1	エアコン, お互い, かわいそう, ご飯, サポートステーション

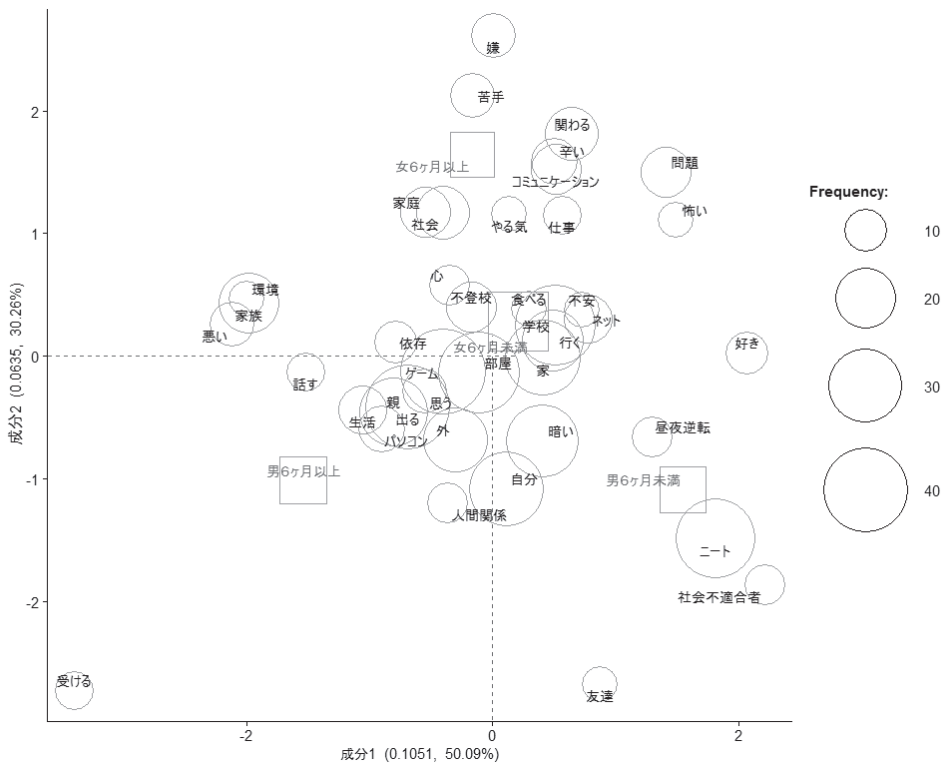


バブルの大きさは語の出現数を表す。共起度が高い程、実線は太い。

Figure 2 6ヶ月以上群のひきこもり家族に対する印象

Table 3 6ヶ月未満群のひきこもりの印象

出現数	抽出語	出現数	抽出語
28	ニート	8	好き, 不登校
25	学校	7	家庭, 社会不適合者, 昼夜逆転, 辛い, パソコン
23	ゲーム	6	原因, 面倒
21	自分, 部屋	5	依存, 嫌, 心, 恐い, 生活, 精神, 食べる, 友達, 人間関係, 勉強
20	暗い	4	抱える, 家族, 考える, 孤独, ストレス, 悩み, 働く, 不安, やる気
19	家	3	陰キャ, 運動, オタク, 外部, カップラーメン, 関係, 感じる, 時間, 自信, 就職, 世界, 低下, 寝る, 必要, 復帰, 太る, 布団, 風呂, 本人, 目, 悪い
12	外, 親	2	甘い, いじめ, 一日中, 居る, インターネット, お菓子, 解決, 会社, 環境, 汚い, 気持ち, 虐待, 拒否, ご飯, コミュ障, 孤立, 失敗, 困難, 自宅, 自宅警備員, 疾患, 失敗, トイレ, ト라우マ, 根, 見る, 持つ, 闇, 2チャンネル
9	コミュニケーション, 関わる	1	(抽出語無し)



バブルの大きさは語の出現数を表す。成分1の軸を「ひきこもりと認める期間」、成分2の軸を「性」と解釈する。

Figure 3. ひきこもりと認める期間と性の違いによる印象の分布

会不適合者」「昼夜逆転」をイメージする傾向が見いだされた。男性の6ヶ月以上群は「ニート」「社会不適合者」という印象を持つことが少なく、「パソコン」「生活」といったひきこもりの生活行動に着目していた。女性は6ヶ月以上群が「コミュニケーション」「苦手」、6ヶ月未満群が「不安」「不登校」をイメージしており、両者共に対人関係が苦手である印象を有していた。

考察

本研究の第一の目的は、6ヶ月以上に渡るひきこもりの印象と、その家族に対する印象を捉えることであった。分析の結果、ひきこもりに対しては、いじめを受けて不登校になっている、外出せず自分の部屋でゲームをしているという印象が抽出された。林・竹島・羽藤・牛島(2017)によると、ひきこもり当事者の不登校経験は4～8割、いじめ経験は2～3割に認められる。また、内閣府(2016)によると、自宅での過ごし方は多い順に「テレビを見る」「インターネット」「ゲームをする」であり、ひきこもりの印象はおおよそ実態と合致していた。しかしながら、本研究では、ひきこもり状態にある人の半数以上が他者との交流を持たない形で買い物や趣味の外出などを行っているという実態(境・中村・植田・坂野, 2007)は示されなかった。ひきこもり経験者の半数は、「居場所が欲しい」「相性の合う人がいる場所に行きたい」とひきこもっていた時に考えていた事実(境他2008)に対し、本研究では「ひきこもり当事者が他者との交流を自ら避けている」という印象が抽出され、実態とは異なっていた。

次に、6ヶ月以上維持されるひきこもり当事者の家族に対する印象は、両親は仕事で忙しい、仲は良くない、家庭は裕福で親は子どもを甘やかしている、会話が少ないというものであった。また、本研究では無関心と過保護が共起しており、家族の両極端な対応が同時に想起されていた。野中・大野・境(2012)は行動理論の観点から、ひきこもり当事者の親が子どもを叱ったり、子どもとの会話を回避する関わりは、親が求める社会的に望ましい行動を増やすように機能せず、ひきこもりを長期化させていることを明らかにしており、本研究から得られ

た家族に対する印象は、こうした実態を反映していた。また本研究において、親が子どもの行動を機能的に捉えることができず、適切な場面で効果的に叱ることが少なく、その結果子どもをひきこもらせている状態を「甘やかす」と捉えている可能性が示唆された。さらに、家族は金持ちであるという印象が認められた。ひきこもり当事者家族の経済状況は、我が国の一世帯辺りの平均収入が528.9万円であった2014年に(厚生労働省, 2015)、ひきこもり当事者家族の同収入が444万円であったことや(全国ひきこもりKHJ親の会, 2015)、親の社会階層が高かったこと(Umeda, Kawakami, & Word Mental Health Japan Survey Group, 2012)が報告されている。ひきこもり当事者家族の経済状況は多様であるが、本研究では裕福であるという側面に印象が偏っていた。

本研究では次に、ひきこもり状態を6ヶ月以上と操作的に定義せず、大学生がどの程度の期間をもってひきこもりと認めるかについて調査し、ひきこもりと認める期間の長さや性差の両面からひきこもりの印象の違いを検討した。その結果、大学生全体では、ひきこもりが3ヶ月続いた時に「通常とは異なる状態」と認識する人が多く、ひきこもりの操作的な定義である6ヶ月より短いことが明らかになった。また、6ヶ月未満でひきこもりと認める男性は、ひきこもっている人を「ニート」や「社会不適合者」などと否定的に捉える傾向が認められた。また、男性は全般に、「パソコン」や「昼夜逆転」などの顕在的行動に着目していた。女性はひきこもりを認める期間による印象の差が少なく、「コミュニケーションが苦手」「不安が強い」といった認知や感情面に着目していた。これらの印象は、ひきこもり状態にあり精神科を受診した人の3割がコミュニケーションを苦手とする発達障害であり、また不安障害や気分障害も3割程度認められる(Kondo, Sakai, Kuroda & Kurosawa, 2013)という実態に即していた。そして、女性は男性よりひきこもりと認めるまでの期間が短い人の割合が多く、ひきこもりの顕在的行動に着目する男性と異なり、ひきこもりの背景にある心理的側面に着目していた。これらの結果から、女性は男性より、ひきこもり

が長期化する前にサポートティブな態度を示すことが期待できる。勝又・高橋（2015）は、心理的支援に関連した講義を受講した大学生にひきこもりの印象を分析しており、ひきこもりが「誰にでも起こりうる身近な問題」であることや「支援やつながりの必要性」を見いだしている。このように、大学の講義の中でひきこもりの実態や、ひきこもり当事者あるいは家族への支援について取り扱うことによりサポートティブな態度やソーシャルサポートを高める可能性が示された。特に、ひきこもりの心理教育の中で当事者と家族や周囲の人との間で交わされる行動の機能に着目することにより、ひきこもり状態を具体的に理解し、当事者との関わりを見いだす可能性が期待できる。

本研究では、大学生のひきこもりに対する否定的印象は顕著なものではなく、また多くは認められなかった。しかし、ひきこもっている人は他者との交流を積極的に回避しているという誤解や、親の子どもへの関わりが偏っているという印象が見いだされた。また、女性の方が男性より他者の対人回避傾向を早期に捉えやすく、ひきこもり状態の心理的側面に注目する傾向があった。本研究から得られた結果は、身近にひきこもり状態にある人がいる大学生を対象としたものではない。今後は、実際にひきこもりを経験した当事者やその家族に対し、ひきこもりに対する社会的な認識や援助要請態度を明らかにし、ひきこもり状態を回避する要因について検討することが必要である。

引用文献

雨宮千沙都・松田英子（2015）. 大学生の家族および友人への援助要請行動に被援助志向性、ソーシャルサポート、その他の心理的変数が及ぼす影響. *江戸川大学紀要*, 25, 159-165.

Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 5-18.

林直樹・竹島正・羽藤邦利・牛島定信（2017）. ひきこもりの研究とその対策の現状—個人・家族・社会の視点から—. *臨床精神医学*, 46, 471-481.

池上正樹・斎藤環・荻上チキ（2016）. ひきこもり報道におけるメディアの問題点とは. *SYNODOS*

ACADEMIC JOURNALISM.

勝又陽太郎・高橋夕佳梨（2015）. 大学生におけるひきこもりのしろうと理論. *人間生活学研究*, 6, 93-100.

Kondo, N., Sakai, M., Kuroda, Y., & Kurosawa, M. (2013). General condition of hikikomori (prolonged social withdrawal) in Japan: Psychiatric diagnosis and outcome in mental health welfare centers. *International Journal of Social Psychiatry*, 59, 79-86.

厚生労働省（2010）. ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン.

厚生労働省（2015）. 国民生活基礎調査.

内閣府（2016）. 若者の生活に関する調査報告書. 平成28年9月内閣府政策統括官（共生社会政策担当）.

中村光・岩永可奈子・境泉洋・下津咲絵・井上敦子・植田健太・嶋田洋徳・坂野雄二・金沢吉展（2006）. ひきこもり状態にある人を持つ家族の受療行動の実態. *こころの健康*, 21, 26-34.

野中俊介・大野あき子・境泉洋（2012）. 行動論的観点からみたひきこもり状態と家族機能の関連. *行動療法研究* 38, 1-10.

境泉洋・中村光・植田健太・坂野雄二（2007）. ひきこもり状態にある人の問題行動が活動範囲に与える影響. *心身医学*, 47, 865-873.

境泉洋・川原一沙・NPO法人全国引きこもりKHJ親の会（2008）. 「引きこもり」の実態に関する調査報告書⑤. NPO法人全国引きこもりKHJ親の会における実態. 1-52.

Umeda, M., Kawakami, N., & World Mental Health Japan Survey Group (2012). Association of childhood family environments with the risk of social withdrawal ('hikikomori') in the community population in Japan. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 66, 121-129.

Vogel, D. L., Wade, N. G. & Hackler, A. H. (2007). Perceived public stigma and the willingness to seek counseling. The Mediating roles of self-stigma and attitude toward counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 54, 40-50.

渡部麻美・松井豊・高塚雄介（2010）. ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討. *心理学研究*, 81, 478-484.

全国ひきこもりKHJ親の会（2015）. ひきこもりの実態およびピアサポーター養成・派遣に関するアンケート調査報告書. 平成26年度セーフティネット支援対策等事業費補助金社会福祉推進事業.

A study of impression of “hikikomori (social withdrawal)” in undergraduate students.

Miyuki Onsen Mejiro University, Graduate School of Psychology

Atsuko Onodera Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2019 vol.15

【Abstract】

The primary purpose of this study was to investigate the impression of hikikomori and their families in undergraduate students. The impression of hikikomori maintaining the withdrawal state for more than 6 months approximately matched the actual condition such as “playing a game in the room”, and a biased impression “they avoid others actively” was recognized. Moreover, they had an impression that families were “indifferent to their children”, or “overly interference”.

As a second purpose, examining the difference in impression between period for which it is deemed as hikikomori and sex, the following results were obtained. Regarding hikikomori, men tended to pay attention to visible behavior such as “playing games” and “day and night are reversing”, women pay attention to their cognitive and emotion such as “weak communication” and “anxiety”. In addition, there were a lot of women who had shorter periods for which it is regarded as hikikomori than men. This study shows that women are more likely to pay attention to the mental conditions of hikikomori than men. If people with this condition are seeking interpersonal exchanges, women can be expected as providers of social support.

keywords : hikikomori (social withdrawal), family, impression, sex difference,
undergraduate students.

